

丹波中学校だより 清流の辺

せい りゅう ほとり

平成28年1月14日(木)

No. 16

文責 丹波中学校長 梶原勝由

3学期 始まる～4月のCH

32日間(夏実さんは22日間)の3学期が始まりました。冬休み中の生活はどうだったでしょうか？また、新年の抱負を抱いて登校したでしょうか？「有森裕子」という人がいます。かつてオリンピックで2度のメダ

ルに輝いた人です。彼女が大切にしてきた言葉があります。それは、「ピンチ(pinch), チャンス(chance), チャレンジ(challenge), チェンジ(change)。」

「ピンチの時こそチャンスと捉え、チャレンジすればチェンジが見えてくる」です。苦しいときや失敗したときに「もう、やってやれない！」とすぐ諦める人はいませんか？また、「どうせ自分はこの程度だ」と思っている人はいませんか？ピンチはチャンスになります。辛く苦しいピンチのときこそ成長できるチャンスと捉え、勇敢にチャレンジすることでチェンジすることができます。ことわざにも「蒔かぬ種は生えぬ」 No autumn fruit without spring blossom があります。大リーグのイチロー選手は「壁というのはできる人にしかやっこない。超えられる可能性がある人にしかやっこない。だから、壁がある時はチャンスだと思っている。」とも言っています。何かをしないと変化は訪れません。

新年は自分を変える大きなきっかけとなります。自分のやってきたことを分析し、評価し、新しい目標を立てて、そこに向かって挑戦していけるとどんなに素晴らしいことかと思えます。自分が過ごしてきた時間と向かい合って、ピンチ・チャンス・チャレンジ・チェンジを当てはめてみよう。そうすればどんなふうになりたいかイメージできるはず。期待します。



私の好きな一冊 「フタのいどころ」シリーズ 小泉吉宏著

僕は本を読むのが大好きです。ここ10年ぐらいは、池波正太郎を初めとする時代小説が愛読書です。ただ、今回は時代小説ではなく、みんなにお勧めしたい「僕の大好きな本」を紹介します。それは本というより漫画です。4コマ漫画です。この本は人生に悩むフタが登場して、泣いたり、笑ったり、怒ったり、悲しんだり、喜んだり・・・そんな中から人生の見方を考えさせてくれる本です。僕もこの本でたくさん励まされ、生き方のヒントをもらいました。中学生の君たちにも暇なときにちょっと見てみるといいかなあ、なんて思います。2年教室に置いてありますので、ぜひ手にとってみて。(文責:齊藤光弘先生, 次回は教頭先生)



私の中学生の頃

担当は堀内理沙先生です。(今月号で終了です。)

私が中学生の時に通っていたのは、都留市にある都留第二中学校という学校です。1クラス約35人、私たちの学年は170人いました。1年～3年まで5クラスずつあり、市内にある学校の中でも大きい方の学校で生活をしていました。多い人数ではありましたが、特に大きな問題をおこす生徒もいなく落ち着いていたと思います。部活動、合唱、挨拶にとっても力を入れており合唱が苦手な私は学園祭の合唱練習がしんどかったのを思い出します。

家から学校へはヘルメットをかぶり、毎日自転車に通っていました。小学生の時に身長が145cmまでいかなかったため、自転車を買ってもらえなかった私は自転車通学で毎日自転車に乗ることが楽しくてたまりませんでした。だからちょっとくらい雨でも気にせず自転車を通っていました。バスケットボール部に所属していた私は、毎朝朝練は1番に行くというこだわりがあり、夏は汗をかきながら、冬は防寒着に手袋とマスクという格好でいつも1番に来る先生と競争をするようにして自転車をこいでいました。

私の中学生時代は常に「バスケ」で頭がいっぱいでした。放課後の練習や土日の1日練習、夜練とたくさん練習がありましたが楽しくて仕方がありませんでした。バスケはチームスポーツなので、私は仲間が辞めてしまう時が1番辛かったです。(ちなみに同級生は7人辞めました)しかし、そんな中でも一緒に苦楽を共に出来る仲間がいたり、顧問の先生が私たちを1番に考えてくれていると感じることができたので、とても充実した日々を送ることが出来ました。その時の友達とは今でもご飯を食べに行ったり映画を見に行ったりします。顧問の先生は、私の試合があるといつも見に来てくれます。とても有り難いです。人と関わる事は時に悩むこともありますが、必ず友達は助けてくれます。みんなもまずは身近な友達から大切にしてみよう。私もこれから先も人とのつながりを大切にしていきたいです。

“創立50周年記念誌～時の音色を奏でて”より①

この記念誌が発行されたのは1997(平成9)年です。50年の歩みや丹波の教育、恩師の言葉、はばたく丹波中学校と題した記録が記載されています。その掲載されていることを紹介していきます。当時の頃に思いを寄せ振り返り、また今はどうなのかを考えてみませんか。

発行時の生徒会長であった、青柳雄大さんは、「あいさつ」で次のように語っています。

丹波中学校が昭和22年創立以来50年の時が経ち、自分たちが今こうしてこの学校で楽しい毎日を送っていただけることをうれしく思います。そして地域の皆さんのご協力を深く感謝しています。

本校が建てられたのは、ちょうど日本が戦争の終わり頃でした。とても貧しく学校に通うことのできない人もいたそうです。それに比べ、今の本校はとても充実した物揃いで生徒一同充実した学校生活を送っています。音楽活動なども1人1台の楽器を受け持ち、楽しく演奏することができます。これも多数の皆さんの生徒に寄せる期待と優しさの表れだと思ひ、感謝したいと思います。

本校の特色として数年前から花を作ることに力を入れてきています。県内でも花のある学校としてかなりの評価を受けています。それだけでなく、花を作ることによってその人の優しさがまた新たに生み出されます。村内のお年寄りとの苗植えや一人暮らしの家へ花を配り、話をしてくるなど村内の人との触れ合いも活発に行っています。そこで、一つの触れ合いの場として最大行事である清流祭では、村民の皆さんに丹波中学校をよく見てもらい、そして行事の中に参加してもらい一体となって盛り上げていきたいと思ひます。

現在、この丹波中学校でいろいろなことを学ぶことができるのも多くの方の協力があってこそだということを忘れずに、日々努力し楽しく過ごしていきたいと思ひます。

その当時から音楽活動や栽培活動が盛んに行われていたようですね。